花火の歴史

●原型は合図の「のろし」

花火を作る時に欠かすことのできないものが黒色火薬です。これは最も古くから知られている火薬で、硝石七十五%、硫黄十五%、木炭十%を原料につくられます。花火の起源を考える時、狭い意味ではこの火薬の発明が始まりとされますが、一方で、その原型を見ると「のろし」にまでさかのぼることができるといわれています。

古代インドやペルシャ、ギリシャ、ローマなどでは、既にのろしの着想があったといわれています。硝石の世界的な産地として知られる中国では、紀元前の時代に「※1烽台」を設けて、緊急通信用にのろしを上げ、硝石は薪などとともに燃料として使用されたという話も残されています。

●中国での火薬の発明

中国での火薬は、※2卑金属を貴金属に変える錬金術と、不老長寿の薬を作ろうとする煉丹術の副産物として登場します。紀元前二世紀に淮南王劉安が著した『淮南子』には「消、流、炭を使って泥を金に、鉛を銀にしたものがいた」という記録が残されています。消は硝石、流は硫黄、炭は木炭と考えると、配合さえきちんとしていれば、この時代に黒色火薬が誕生した可能性は十分にあると想像できます。

貴金属や薬を作る時の副産物として始まった火薬の研究は、煉丹術師から軍事技術者へ移りようやく唐の時代（六一八～九〇七）に確立、次第に火薬兵器の開発へと発展していきます。

花火としては、南宋時代（一一二七～一二七九）には既に爆竹やねずみ花火に近い本格的な花火が市場に出回り、宮廷をはじめ庶民の間でもこれを楽しんだといいます。

●近代花火の発祥

中国で基礎が確立された火薬は、商人を通じてイスラム諸国、ヨーロッパへと伝わっていきました。その爆発力に注目した各国は、すぐに火薬を軍事力に利用し始めます。一方で、黒色火薬は一三一三年にドイツの僧ベルトルト・シュワルツが発明したという説も伝えられていますが、いずれにせよ、十三世紀から十四世紀のころにはヨーロッパで火薬が使われていたということになるでしょう。

ヨーロッパで花火が最初に登場するのは、